

# ソーシャル・キャピタルとしての寺院の役割について

愛知大学総合郷土研究所 藤喜一樹

## 1 目的

今日、宗教と社会の関係では、多くの世論調査で見られるように、「宗教を信仰する」人の割合は約3割にすぎない。とりわけ大都市では、檀家制度としての基盤が薄れており、寺と家の絆が特に深いわけではない。むしろ檀家制度の枠組みから離れている方が多数派である。そのため、多くの寺院が社会から閉ざされた公共空間となっている。このような都市では、人との絆を保てる機会、あるいは場所に不自由することがない。しかしながら、本報告では過疎地域において寺院が社会に開放された公共空間となっている事例があることを「ソーシャル・キャピタルとしての寺院の役割」という視点から考察した。

## 2 方法

2011～2013年、住職S氏と住職夫人に、ライフヒストリー中心のインタビュー（1～数時間、複数回）を実施した。語りの内容について本報告では、「ソーシャル・キャピタルとしての寺院の役割」に焦点をあてて分析した。宗教施設の運営に関する語りには宗派・地域性・年代等による差異もあることも考慮して検証した。

## 3 結果

寺院がソーシャル・キャピタルとして位置づけられる背景には、住職および住職関係者を取り巻く環境にどのような特性を有しているのかを検討した。ここでS氏のライフヒストリーを見ていくと、S氏は三重県津市の山間部に1948年に生まれ、15歳で高校進学のため、40キロ離れた高校に進学するため村を離れた。S氏は20歳で専門学校を卒業し、日立へ就職のため上京した。その後、S氏は24歳で独立し、20名規模の会社に成長させ経営していくが、このコンピューター業界には35年間いたのだった。しかしながら、S氏は55歳で故郷に帰り、住職となるが、東京での生活から、若い時には気づかなかった、自然の大切さに目覚める。同時に、S氏はコンピューター業界で得たネットワークの技術を駆使し、宗教活動と同時に、環境保護のためのNPOの紹介をホームページで立ち上げ、村社会が抱えている環境の危機を呼びかけ、環境保護に関連した活動を随時発信していく。したがって、従来の寺院で受け継がれてきた寺の行事である文化・伝統を檀信徒とともに維持していく為に、寺と檀信徒が相互交流していきながらも、NPOを通じて、寺が檀信徒、外部の人々、双方に開かれた、新しいタイプのソーシャル・キャピタルの拠点を作りあげている。

## 4 結論

今日、都市部の多くの寺院では、寺が地域社会に開放されておらず、閉ざされた空間となっているが、本報告でとりあげた「ソーシャル・キャピタルとしての寺院の役割」では、寺の行事を通して、村人との交流を持つ拠点であると同時に、NPOを通じて外部にも開かれた寺院として、一定の役割を果たしているものと考えられる。